

Title	世帯構成の分類モデル：ハメル・ラスレットモデルの限界と修正可能性
Sub Title	Hammel and Laslette model of household structures : limits and modification
Author	岡田, あおい(Okada, Aoi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2004
Jtitle	哲學 No.112 (2004. 3) ,p.107- 130
JaLC DOI	
Abstract	The objective of this paper is to describe the significance and limits of the Hammel and Laslett model, a classification model of household structures frequently used in the field of historical demography, and to discuss the possibility of its modification. The significance of the Hammel and Laslett model lies in its capability of analyzing a variety of household structures ranging from single households to more complicated composite family households. The model is useful for comparative analyses of household structures. However, some researchers, particularly those studying societies where complicated family structures are prevalent, criticize the model, for its inability of classifying complicated family structures. Also, the model has a fundamental problem with its classification criteria. In this paper, those criticisms against the model are sorted out, their causes are elucidated, and limits of the model are clarified. Furthermore, the paper shows that the limits can be overcome by making a minimum modification to the model. Calling it "the modified Hammel and Laslett model", the paper proposes a possibility to make the model truly viable for the diachronic and transcultural classification comparison.
Notes	特集家族とその社会的な生活世界の探求 論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000112-0109">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000112-0109</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 世帯構成の分類モデル

～ハメル・ラスレットモデルの限界と修正可能性～

岡 田 あ お い\*

### **Hammel and Laslette model of household structures: limits and modification**

*Aoi Okada*

The objective of this paper is to describe the significance and limits of the Hammel and Laslett model, a classification model of household structures frequently used in the field of historical demography, and to discuss the possibility of its modification.

The significance of the Hammel and Laslett model lies in its capability of analyzing a variety of household structures ranging from single households to more complicated composite family households. The model is useful for comparative analyses of household structures. However, some researchers, particularly those studying societies where complicated family structures are prevalent, criticize the model, for its inability of classifying complicated family structures. Also, the model has a fundamental problem with its classification criteria.

In this paper, those criticisms against the model are sorted out, their causes are elucidated, and limits of the model are clarified. Furthermore, the paper shows that the limits can be overcome by making a minimum modification to the model. Calling it “the modified Hammel and Laslett model”, the paper proposes a possibility to make the model truly viable for the diachronic and transcultural classification comparison.

---

\* 帝京大学文学部社会学科助教授

## 1. 本稿の目的

本稿は、歴史人口学の世帯構成の分類モデルとして利用頻度の高いハメル・ラスレットモデル<sup>1</sup>の意義と限界を明らかにし、その修正可能性を探ることを目的とする<sup>2</sup>。これまで家族構成や世帯構成の類型と分類は多くの研究者によって考案されてきた。家族類型について、たとえば、F. ル・プレーはヨーロッパ諸国の家族の実態に基づいて、不安定家族 (*famille instable*)、直系家族 (*famille souche*)、家父長家族 (*famille patriarcale*) という3類型を提示した。G. P. マードックは、普遍的な家族の理念型は核家族であるとし、家族類型として核家族 (*nuclear family*)、核家族の複合形態である拡大家族 (*extended family*) と、複婚家族 (*polygamous family*) の3類型を提示している。その他にも鈴木栄太郎、中根千枝らが類型を提示している。家族の分類としては、O. ラング、森岡清美の家族員の組み合わせを基準として作成された、夫婦家族 (*conjugal family*)、直系家族 (*stem family*)、複合家族 (*joint family*) の3分類がもっとも有名であろう<sup>3</sup>。

分類は、分析の道具であり、研究対象に適応するものを考案すればよいとされている<sup>4</sup>。しかし、歴史人口学の一つの研究方法である比較を念頭に置くと、研究者によってさまざまな分類が作られ使われることは、細緻な研究を不可能にし、生産的であるとはいえない。したがって、少なくとも歴史人口学の研究領域においては通時的通文化的な分類モデルの構築が不可欠である<sup>5</sup>。

徳川後期の宗門改帳を史料とした歴史人口学の世帯構成の先行研究を見ると、鬼頭宏と木下太志はハメル・ラスレットモデルを用いたが、R. J. スミスは、このモデルを使わずに、小山隆の分類を修正して、西宮と大阪の町内の世帯構成を観察している<sup>6</sup>。L. コーネルもハメル・ラスレットモデルは徳川期の世帯構成を分類するには適さないとして、独自の分類を提示

し、信州横内村の宗門改帳を史料として分析をおこなっている<sup>7</sup>。また、中国の世帯構成を分析した J. リー と J. ジェルデは、ハメル・ラスレットモデルの分類では複合世帯 (joint household) の周期的変化を完全に復元することができないと述べ、独自の分類スキームを考案している<sup>8</sup>。このように、複雑な世帯構成が存在する地域の世帯構成を実際に分析している研究者の中には、ハメル・ラスレットモデルを利用しない者がいる。そこで、本稿では、なぜ 19 世紀の日本の世帯構成のように複雑な世帯構成を分類するのにこのモデルが不適當なのかを、実際に史料上存在する世帯構成の例を挙げながら検討し、その問題点を明らかにしたい。次に、このモデルをいかに修正すれば、通時的通文化的なモデルになりうるのかを検討し、修正モデルを提示する。本稿では、特に徳川期の宗門改帳を史料として世帯構成を分析する場合に有用な修正モデルを構築し、この修正モデルが通時的通文化的なモデルになりうる可能性を探っていきたい。

## 2. ハメル・ラスレットモデルの意義

ハメル・ラスレットモデルは、国勢調査以前の住民の記名台帳を史料とする世帯構成の分類モデルであり、家族形態に注目した分類である。このモデルを作成した目的は、通時的通文化的に世帯形態を比較分析することであり、イングランドの住民台帳を拠り所としている。したがって、このモデルの基礎となる単位は夫婦と未婚の子どもたちからなる夫婦家族単位 (conjugal family unit: 以下 CFU と略す) である<sup>9</sup>。夫婦家族的形態を分析単位と設定し、この分析単位の組み合わせにより形態的分析を試みる点から、このモデルはマードックの社会構造分析の延長線上に位置づけられる<sup>10</sup>。

このモデルでは、まず、奉公人、外来共同居住者といった非家族世帯員がいる世帯と、いない世帯に分類する。次に、カテゴリーと、その下位に位置づけられた分類単位であるクラスの二つのレベルで世帯を分類する

★表 1 ハメル・ラスレットモデル (Structure of households: categories and classes)

Category		Class
1 単独世帯 <i>Solitaires</i>		1a 寡男 (婦) 1b 独身者 or 結婚不明者
2 非家族世帯 <i>No family</i>		2a 兄弟姉妹の共住 2b その他の親族の共住 2c 明確な絆を持たないものどうしの共住
3 単純家族世帯 <i>Simple family households</i>		3a 夫婦 3b 夫婦と子ども 3c 寡男と子ども 3d 寡婦と子ども
4 拡大家族世帯 <i>Extended family households</i>		4a 上向的 4b 下向的 4c 水平的 4d 4a, 4b, 4c のコンビネーション
5 多核家族世帯 <i>Multiple family households</i>		5a 上向的副次核を含む 5b 下向的副次核を含む 5c 水平的副次核を含む 5d Frèrèches 5e その他
6 確定した構成をもたない世帯 <i>Indeterminate</i>		
<i>Stem families</i>	{	5b 5b+5a 5b+5a+4a
<i>Frèrèches</i> alternative definitions	{	5d 5d+5c 5d+5c+4c 5d+5c+4c+2a

出典: Laslett [1972-a] P. 31 Table 1.1

(表 1). カテゴリーは, 1 単独世帯 (solitaires), 2 非家族世帯 (no family), 3 単純家族世帯 (simple family households), 4 拡大家族世帯 (extended family households), 5 多核家族世帯 (multiple family households), 6 確定した構成をもたない世帯 (indeterminate), という六つの

分類からなる。

1 単独世帯は、1人で世帯を形成している場合であり、2 非家族世帯は、兄弟姉妹であるとか、親族関係にないものを含めた居住を共にするもの、3 単純家族世帯は、夫婦のみ、夫婦と未婚の子ども、あるいは片親と未婚の子どもたちからなる世帯、4 拡大家族世帯は、カテゴリー3に他の親族が同居している世帯、5 多核家族世帯は、同一世帯内にCFUが二つ以上存在する世帯、6 確定した構成をもたない世帯、である<sup>11</sup>。

各カテゴリーには、それぞれ下位分類であるクラスという単位の分類がある。クラスは、基本的には、戸主（世帯主）のCFUから上方向に広がるか、水平方向に広がるか、下方向に広がるかによる分類である。

このモデルの意義は四つある。一つ目は、このモデルの分類の単位が夫婦と未婚の子どもたちからなる夫婦家族におかれている点である。夫婦家族が基本となる単位であり、このユニットがどのように結びついているかによって分類が作成されているために、CFUを構成しない一人からなる世帯や兄弟姉妹で構成された世帯からCFUが複雑に結びついている世帯まで多様な世帯構成を分類可能にする。そのために、世帯員の異動に伴って発生する世帯の構成の変化を詳細に観察することができる。たとえば、クラスというカテゴリーの下位単位を用いれば、夫婦家族でも、夫婦のみからなる世帯(3a)、夫婦と子どもからなる世帯(3b)、そして片親と子どもからなる世帯(3cあるいは3d)に分類ができる。特に、史料の残存期間が短く世帯構成の周期的変化を分析できないような場合には、詳細な分類が可能なこのモデルは有用である。二つ目は、分類の単位がカテゴリーとクラスに分かれているために研究目的にあわせて大分類を用いるか、小分類を用いるかが選択できる点である。

三つ目は、このモデルの利用頻度が高い点があげられる。このモデルは史料に住民の記名台帳を用い、世帯構成を分類するモデルであり、通時的通文化的な比較を目的として作成されている。分類を作成する際にはイン

グランドの住民台帳がその拠り所となっはいるが、もちろん 17, 18 世紀のセルビアや日本の史料も検討されている<sup>12</sup>。そのため、現在歴史人口学の研究領域では、このモデルに対する批判はあるものの、世帯構成を分類する場合、最も利用されているのはこのモデルである<sup>13</sup>。したがって、歴史人口学の一つの方法である地域比較をおこなうためには、先行研究との比較が可能なこの分類モデルを用いることが最も有効であるように思われる。

四つ目の意義は、このモデルが意識的に完成されていないために、観察地域に特有な世帯構成にあわせて分類をつけ加えることができる、という点である。ハメル & ラスレットは、通時的通文化的な分類モデルの構築を目的としたが、あらゆる社会のあらゆる世帯構成を分類する完全なモデルなど作れないことがわかっていて、修正の余地を十分に残した一つの基準を提示したに過ぎないものと思われる。その証拠に、分類モデルの表の欄外に註として、「さらに下位分類を研究者の自由な裁量で加えることができる<sup>14</sup>」と記している。ここに記されているとおり、観察地域の家族制度や理念的家族像などを考慮した分類を加えることが可能になっている。

これらの点から、批判は多くてもハメル・ラスレットモデルが最も有用なモデルである、といえるのである。

### 3. ハメル・ラスレットモデルに対する批判と分類モデル

ハメル・ラスレットモデルは、多様な世帯構成を分類することができる有効な分類モデルである。しかし、このモデルには多くの批判がある。そこで、このモデルの問題点を明らかにするために、歴史人口学の先行研究のなかで、このモデルを利用せずに世帯構成の分析をおこなった研究者のこのモデルに対する批判と、彼らが考案し、実際に実証研究に用いた分析モデルを概観してみよう。

まず、スミスは、ハメル・ラスレットモデルについては言及せずに新た

な分類モデルを構築している。スミスの世帯構成の分類モデルは、1802(享和2)年から1861(文久元)年までの60年に渡る甲斐国山梨郡山崎村浄土真宗人別改帳を史料として家族形態の周期的変化を観察した小山の分類を修正したものである。小山は、家族形態を(1)単身世帯、(2)夫婦世帯、(3)無配偶子女を含む世帯、(4)有配偶子女を含む世帯、(5)直系尊属を含む世帯、(6)直系尊卑属を含む世帯、(7)傍系親族を含む世帯、以上の七つに区分した<sup>15</sup>。スミスは、小山の(1)から(4)までをそのまま(A)～(D)に置き換え、小山の(5)を(E)2世代からなる直系家族(戸主は2世代目)と(F)2世代からなる直系家族(戸主は1世代目)に分けた。さらに、(6)と(7)を(G)3世代からなる直系家族(戸主は真ん中の世代)、(H)3世代からなる直系家族(戸主は3世代目)、そして(I)4世代からなる直系家族に分け、合計九つの分類を作成した<sup>16</sup>。スミスが下敷きにした小山の分類は、前述したとおり、直系家族の周期的変化を観察するために考案されたモデルであるから、直系家族の形態的变化を観察するには最適である。これに、スミスは修正を加え、戸主(世帯主)がどの世代に属するかを明確に表そうとしている。したがって、戸主(世帯主)がどのように世代間を移行するかも周期的変化を観察するなかで明らかにすることができ、形態的側面から間接的にではあるが家族の制度的側面を観察することも可能にした。しかし、小山の分類に対しては森岡が、スミスのモデルに対しては高木正朗がすでに指摘しているように、両モデルともに複合家族(joint family)を単独で分類することができないのである<sup>17</sup>。筆者が観察した会津山間部4か村の宗門改帳からも複合家族世帯は14,145ケース中552ケース(3.90%)存在した。会津山間部は、西日本に比べ複合家族からなる世帯が少ないといわれている地域であるにもかかわらずである。また、小山とスミスのモデルは、戸主(世帯主)が不明のケースやきょうだいからなる家族のケースを分類することもできない。これらのケースが分類できなければ、たとえ直系家族の周期的変化を解明することができたと



しても、あらゆる世帯構成を網羅することができたことにはならず、精度が高い分類とはいえない。

次に、コーネルの主張を整理しておこう。コーネルは、ハメル・ラスレットモデルを国際比較には有用であるかもしれないが、このモデルは直系家族からなる世帯ときょうだい夫婦が同居している複合家族 (joint family) からなる世帯が同じ多核家族世帯 (multiple family households) に分類されることになり、日本のような文化的原理 (principles) を無視している、と述べている<sup>18</sup>。コーネルにとって、直系家族世帯を単独で拾い上げることができないこのモデルは利用する価値がなかったのだろう。コーネルは、世帯を (1) 単身者 (single), (2) 夫婦 (married couple), (3) 夫婦と子どもたち (nuclear), (4) 直系 (stem), (5) 複合 (joint), (6) その他 (other) の六つに分類し、横内村の世帯構成を観察している<sup>19</sup>。この分類は、単身者が結婚し、子どもを持ち、そのうちの一人が結婚し同居する、そして他の子どもたちが結婚する、という直系家族の発展段階を基盤に置いた分類である。この分類は、小山やスミスのモデルとは異なり、世帯の形態のみに着目しており、戸主 (世帯主) がどの世代に位置づけられるかという視点は含まれていない。

リー & ジェルデは、家族理念として複合家族が優勢な中国、直系家族が優勢なノルウェー、そして夫婦家族が優勢なアメリカの史料について、ハメル・ラスレットモデルを用いて世帯構成を分類し、このモデルでは複合世帯のサイクルを完全に復元することができないことを実証研究から明らかにし、その理由は戸主 (世帯主) がその家族構成のなかでどの世代に位置づけられるかを明記していない点にあると主張している。リー & ジェルデは、世帯分類の普遍的方法を新たに提示した<sup>20</sup>。彼らのスキームは、五つの位の数で表される。これは五つの世代を数値で表わすために設定された。戸主 (世帯主) の世代を真ん中に置き、一番左が祖父母の世代、左から二番目が両親の世代、戸主 (世帯主) の世代の右が子どもの世

代、一番右端が孫の世代となっている。次に、各世代の位に夫婦数 (conjugal unit) を表記することで世帯構成を分類する。このスキームは、戸主 (世帯主) がどの世代に位置するかを基準とし、何世代もからなる複雑な世帯構成の分析に適している。リー & ジェルデが指摘したハメル・ラスレットモデルの欠点は、このスキームでは解消されている。しかし、直系家族の分類を念頭に置いた場合、このスキームの最大の問題点は、戸主 (世帯主) 夫婦と子どもたち、両親からなる世帯と、戸主 (世帯主) 夫婦と子どもたち、そして戸主 (世帯主) のおじ夫婦からなる世帯は同じ分類 (01100) に含まれてしまうことである。このスキームは、直系家族からなる世帯を拾い出せないというハメル・ラスレットモデルの欠点と同じ欠点を内包しているのである<sup>21</sup>。

これらの研究者に共通するハメル・ラスレットモデルに対する批判は、複雑な世帯構成を分類するにはこのモデルは不適當である、という点である。彼らは、直系家族世帯、あるいは複合家族世帯を単独で拾い出すことがこのモデルではできないことを、リーらなどは実証研究から明らかにし、それぞれ独自の分類を作成した。また、独自の分類を作成する時、スミスとリー & ジェルデが共通しておこなったことは、戸主 (世帯主) の世代的な位置づけを明確にすることであった。しかし、どの分類モデルも通時的・通文化的モデルとして考えるならば欠点があり、ハメル・ラスレットモデルを超えるものではない。

ハメル・ラスレットモデルの欠点が明らかになってきたので、モデルの修正に何が必要なのかを考える手がかりとして、家族社会学の家族構成の分類モデルをみておこう。もっとも有名な分類は、家族員の続柄の組み合わせを基準とした、(1) 夫婦家族、(2) 直系家族、(3) 複合家族という分類である<sup>22</sup>。これを森岡は、核家族説にたって、(1) の夫婦家族を核家族が単独で存在する形態、(2) 直系家族を1人の既婚子を要として定位家族と生殖家族が世代的に結合した形態、(3) 複合家族を複数の既婚子が共属す

る定位家族を要として、複数の生殖家族が結合した形態、と説明している<sup>23</sup>。この分類モデルは、非常に単純であり、現代の日本の家族形態を分類するには十分であると思われる。しかし、森岡はこの三分類を提示した後、分類の基準を核家族よりも小さい機能的な要素的単位であるダイアド(dyad)に求め、家族周期の観察を可能にする再分類をおこなった<sup>24</sup>。上記の3分類では、家族構成の周期的変化の精密な分析は不可能であるためである。異動の少ない現代家族の周期の分析には、このように細かい分類が相応しいかもしれないが、異動の激しい徳川期の世帯構成を分類には複雑すぎる。

以上の批判や諸分類の観察から、ハメル・ラスレットモデルは直系家族世帯と複合家族世帯が分離されていない点と、複雑な家族あるいは世帯の戸主（世帯主）の世代的位置づけが観察できない点が問題になっていることが明らかになった。

#### 4. ハメル・ラスレットモデルの限界

ハメル・ラスレットモデルは、利用頻度が高い分類モデルであるが、第3節で取り上げた研究者が論じていることからわかるとおり、このモデルには限界ともいうべき、重大な欠点がある。それは、複雑な世帯構成がひとつのカテゴリーに組み込まれてしまい、直系家族世帯あるいは複合家族世帯をそれぞれ単独に捕らえることができない点である。このモデルは、前述したとおり、イングランドの住民台帳を拠り所として作成された。周知のとおり、イングランドの家族構成は核家族を典型とする。そのために、核家族の発展サイクル上出現するような世帯構成はすべて網羅されている。しかし、より複雑な世帯構成の分類になると、精密度が欠ける。この点が問題なのである。

一つの例として、日本の典型的な世帯構成といわれる直系家族世帯がこのモデルを使うとどのように分類されるのかを検討してみよう。戸主（世

帯主) 夫婦と子どもたち, そして両親からなる直系家族世帯をカテゴリーという単位を用いて分類してみると, この直系家族世帯はカテゴリー5に分類される。しかし, カテゴリー5は同一世帯内に二つ以上のCFUが存在するケースであるから, たとえば, 上記の直系家族に戸主(世帯主)の弟夫婦が加わった複合家族からなる世帯もこのカテゴリーに分類されることになる。すなわち, このカテゴリーという単位を用いて直系家族世帯の正確な数を明らかにしようとしてもそれは不可能なのである。カテゴリーという単位では分類できなくても, カテゴリーの下位単位であるクラスという単位を用いれば直系家族世帯のケース数を明らかにできれば問題はない。上記の直系家族世帯の場合は, 5a というクラスに分類される。しかし, 厳密には, これでも直系家族世帯だけを拾い上げることはできない。なぜならば, 5a というクラスには複合家族世帯が含まれるからである。この点が複雑な世帯構成の形態的研究をおこなう者にとって致命的なのである。クラスという単位を用いたとしても, この単位を用いただけでは直系家族世帯の数を明らかにすることはできない。

さらに, ハメル・ラスレットモデルでは, 直系家族世帯は表1にあるように, 5a ばかりでなく, 他に 5b, 5b+5a, 5b+5a+4a といった, クラスという単位を用いたケース, そしていくつかのクラスを組み合わせた形を作らないと示すことが不可能なケースからなっている。もちろん, 実際に史料を観察すると, ここに示された以外にも直系家族世帯の形態はいくつも発見される。したがって, クラスという単位の複合型を作ったところで, 直系家族世帯を正確に捕らえることはできないのである。

カテゴリーという単位を用いても, クラスという単位を用いても直系家族世帯のケース数を明らかに示すことができないのであれば, このモデルを用いる意味はない。徳川後期の宗門改帳を史料として世帯構成を分析したスミスやコーネル, あるいは19世紀の中国の世帯構成を分析したリー&ジェルデがこのモデルを利用しなかった理由は, まさにこの点にある。

この点こそが、このモデルに対する最大の批判点であり、このモデルの限界なのである。

実際に宗門改帳を史料として世帯構成を分類する際に、このモデルでは分類しにくいケースを確認し、ここからこのモデルの論理的な矛盾を明らかにしていこう。

徳川期の世帯構成を分類する際、分類が不可能になる、あるいは分類することを躊躇するケースは、カテゴリー 5 の下位単位である 5a から 5e までの五つのクラスを用いる場合である。分類が不可能になるケースとしては、寡の戸主（世帯主）と長男夫婦、そして長男の子ども夫婦からなる世帯が一つの例としてあげられる。この例は CFU が二つあるのでカテゴリー 5 に分類される。カテゴリーの下位単位であるクラスを用いて分類しようとした場合、この世帯の形態のみに注目すれば、5a か 5b のどちらかに分類されるはずである。しかし、戸主（世帯主）が寡であるために、中心となる CFU が存在せず、クラス 5a にも 5b にも分類できない。そこで、この場合、5e に分類されるか、あるいは、形態を重視し 5a か 5b のどちらかに無理やり分類されてしまうかもしれない。このように、中心となる CFU が存在しないためにクラスという単位を用いて分類しようとした時混乱が発生するケースが多数出てくる。

次に、分類はできるが困惑する例をあげておこう。会津山間部や二本松藩の宗門改帳では頻繁に見られる世帯構成である、戸主（世帯主）夫婦と両親、そして息子夫婦からなる世帯のケースである。これは表 1 の欄外にあるように 5a+5b という形であり、クラスという単位だけを用いて分類しようとするれば、5e に分類されることになる。直系家族世帯が多数存在し、このようなケースが頻繁に見られる場合、欄外に 5a+5b という分類が新たに作られ、このようなケースは別扱いにされるかもしれないが、5e に分類してしまう方が自然であろう。一度、5a+5b のようにクラスが連結した形を欄外に書き出した場合、これ以外にも書き出す必要が生じる

ケースは多数存在し、無限に分類が作られることになるだろう。そうなれば、煩雑になりこのモデルを利用する意味が薄れる。

徳川期の東北の農民社会では世帯構成の複雑な例は頻繁には見られないが、それでも、戸主（世帯主）夫婦と未婚の子どもたち、おじ夫婦と彼の長男夫婦、そして彼の未婚の次男からなる複雑な世帯が観察される<sup>25</sup>。このケースの場合は、カテゴリー5に分類されるが、クラスという単位を用いようとするとも5eに分類される。すでに、高木の指摘もあるように、この5eという分類がまた問題なのである<sup>26</sup>。前述した直系家族世帯の例以外にも、戸主（世帯主）夫婦、両親、長男夫婦と戸主（世帯主）の弟夫婦からなる世帯や、戸主（世帯主）夫婦、長男夫婦そして戸主（世帯主）の甥夫婦からなる世帯などさまざまな複雑な構成の世帯がここに分類されてしまい、直系家族からなる世帯と複合家族からなる世帯が混合する。

このような例からもハメル・ラスレットモデルは複雑な世帯構成を分類には不適合であることがわかるだろう。直系家族世帯と複合家族世帯が一つの分類の中に混在してしまい、夫婦家族からなる世帯のような精密な分類ができないのである。

このような混乱が生じる原因は、このモデルがもつ矛盾点にある。このモデルは戸主（世帯主）のCFUの位置が副次的CFUの位置を決める基準になっている。この点が混乱を招く原因である。この基準があるために、戸主（世帯主）がわからないケース、あるいは戸主（世帯主）が単身者でしかも同一世帯内にCFUが二つ以上存在するケースなど、分類が不可能になるケースが多数発生してしまうのである<sup>27</sup>。

次に、この点ともかかわるのであるが、このモデルが抱える矛盾点を指摘しておきたい。カテゴリーという単位は、すべて戸主のCFUを設定しなくても分類ができるので、この単位に関しては問題がない。世帯の形態のみに着目した分類になっている。問題はクラスという単位なのである。カテゴリー1からカテゴリー4の下位に位置づけられているクラスとい

う単位は戸主（世帯主）の位置を確定する必要がない。カテゴリー 4 までは同一世帯内に CFU がまったくないか、一つしかないので、カテゴリーという単位を用いて分類するのと同様にクラスも世帯の形態のみを見て分類するようになっている。しかし、カテゴリー 5 の下位に位置づけられているクラスだけは、中心となる戸主（世帯主）の CFU を設定しなければ分類ができないのである。同じクラスという分類の単位の中に、中心となる CFU を設定しなければ分類ができない場合と、できる場合があることになる。つまり、同一単位内に基準が二つあること、これがこのモデルの矛盾点なのである。

## 5. 修正ハメル・ラスレットモデル

直系家族を典型とする日本の世帯構成を分析した、スミスやコーネルがハメル・ラスレットモデルを利用せずに、小山の分類モデルを修正して用いたり、独自のモデルを構築した理由は、直系家族世帯を独立したカテゴリーとして位置づけたいがためである。もちろん、リー & ジェルデも同様に、中国の典型である複合家族世帯をより詳細に分類する方法を考案せざるを得なかったのであろう。しかし、本稿では新たな通時的通文化的なモデルを作成しようとは考えない。第 3 節で概観した新たな分類も一長一短があった。ハメル・ラスレットモデルの矛盾点は明確であるから、この矛盾を回避するような修正を加えれば、このモデルは通時的通文化的なモデルとして十分に利用可能であると考えられるからだ。

そこで、このモデルをどのように修正すればよいのかを考えることにしよう。第 2 節で論じたとおり、このモデルは修正の余地を十分に残している。ただし、先行研究で示された諸外国の世帯構成との国際比較や、わが国のいくつかの地域の世帯構成との比較を可能にするためには、修正はできるだけ最小限に止め、もとのモデルに戻し得る、しかも単純な形にすることが絶対条件となる。

修正しなければならない点は、カテゴリー 5 多核家族世帯 (Multiple family households) についてである。このモデルの矛盾点は、前述したとおりカテゴリー 5 の下位単位であるクラスだけが、戸主 (世帯主) の CFU を明確にしなければならなかった点にある。リーらは、ハメル・ラスレットモデルでは戸主 (世帯主) の位置づけができないために世帯の周期的変化の過程を表すことができないと批判した<sup>28</sup>。まさに、この批判はこの矛盾が生んだ批判なのである。分類の一部で戸主 (世帯主) の CFU を設定し、一部でそれを必要としなかったことがこのような批判を受ける原因である。

この矛盾を解決するには、カテゴリー 5 の下位単位のクラスを全面的に変更する必要がある。クラスは、縦に CFU が直系に連結する、しかも一世代に一つの CFU からなる直系家族世帯とそれ以外の複合家族世帯に二分すればよい。そうすることによって、中心となる CFU を設定しなくても分類できるカテゴリー 1 からカテゴリー 4 までの下位単位のクラスと同一の基準による分類となり、矛盾を回避することが可能になる。さらに、戸主 (世帯主) の世代を明らかにした細かい分類が必要ならば、この二つのクラスの下に新たな単位を設ければよい。

しかし、これではできるだけ修正を最小限にとどめ、元の分類に戻せる形にするという条件を無視したことになる。この修正では、5a から 5e までの五つのクラスをすべて破棄しなければならないことになってしまう。

そこで、新たにサブカテゴリーという単位をカテゴリーとクラスの間を設置することで、この問題を回避し、修正ハメル・ラスレットモデルを構築することにしよう。もちろん、カテゴリー 1 からカテゴリー 4 までにはこのサブカテゴリーをおく必要はない。カテゴリー 5 の下位にだけに、サブカテゴリー 5 i 直系家族世帯 (Stem family households) とサブカテゴリー 5 ii 複合家族世帯 (joint family households) をおく。これで、複雑な世帯構成をもつ社会の研究をおこなうものにとって最小限度必要な分



類は提示することになる。カテゴリーとサブカテゴリーという単位を用いて世帯構成を分類することが有用な分析をおこなうには、この修正さえおこなえば十分なのである。たとえば、筆者がおこなった徳川期の世帯の周期的変化を観察するには、分類が多すぎては複雑すぎて周期を見出すことが不可能になるために、カテゴリーとサブカテゴリーの単位だけを使って分析をおこなった<sup>29</sup>。世帯の周期的変化を観察する場合、戸主（世帯主）の位置づけを分類に含めたモデルを用いると、やはり複雑になりすぎ、周期そのものを見出せない結果になる。世帯構成の周期的変化を観察するには、世帯構成の形態のみの観察がもっともふさわしいものとする<sup>30</sup>。

サブカテゴリーを設けることで、カテゴリー5の下位単位であるクラスもそのままの形で残すことができる。しかし、このままでは、カテゴリー5の下位単位のサブカテゴリーとクラスが連結されない。

そこで次に、カテゴリー、サブカテゴリー、クラスを連結させるために、多少複雑になるが、クラスという単位の下位にサブクラスという単位を新たに設けることにしたい。その理由は、既存のクラスという単位を用いると、直系家族世帯と複合家族世帯が同一のクラスに分類され、両者を分けることができないからである。そのために、カテゴリー5の下位単位のクラスに限っては、戸主（世帯主）のCFUを基準となるCFUとして設定する。これでは、このモデルの矛盾点をそのまま残すことになるが、この矛盾はサブカテゴリーを加えたことで回避している。もちろん、戸主（世帯主）が誰だかわからないケース、また戸主（世帯主）が単身者であるケースなどが史料上存在する。これらのケースも分類できるようにしなければならない。この問題もサブクラスを設けることで同時に解決することにしよう。

クラス5a（上向的副次CFUを含む）は、このままでは直系家族世帯と複合家族世帯を分離することができないので、サブクラス5a i（上向に直系のCFUが連結し、しかも同世代にCFUが一つの場合）と、サブ

クラス 5a ii (上向に傍系の CFU が連結する, あるいは上向の同世代に複数の CFU が連結する場合) に分ける. 5b も 5a 同様に, サブクラス 5b i (下向に直系の CFU が連結し, しかも一世代に CFU が一つの場合) と, サブクラス 5b ii (下向に傍系の CFU が連結する, あるいは下向の同世代に複数の CFU が連結する場合) に分ける. 5c, 5d にはサブクラスを作成する必要はない. 5e は, 5a, 5b 同様にこのままでは直系家族世帯と複合家族世帯を分離することができない. そこで, 5e も, 5e i (5a i + 5b i), 5e ii (戸主の CFU が不明, あるいは戸主が単身者であるが直系に縦に CFU が連結している場合, しかも同世代に CFU が一つの場合), 5e iii (5e i, 5e ii 以外のケース, 戸主不明のケースも含む) とする. 5e ii を作成することで, 戸主 (世帯主) がわからないが形態としては直系家族世帯というケースも, 分類が可能になる (表 2).

これで, 必要なクラスの下位にサブクラスという単位を設けることができた. 本稿では, 直系家族からなる世帯構成が独立した形で分類できるように 5a, 5b, 5e のサブクラスをいくつかに分類したが, 複雑な複合家族からなる世帯構成をより詳細に分類したい場合は 5a ii, 5b ii, そして 5e iii をさらにいくつかに分ければよい. また, 高木が指摘している, クラス 3c と 3d の, 戸主 (世帯主) が親世代である場合と子ども世代である場合を分ける必要がある場合には, サブクラスは戸主 (世帯主) が誰なのかを基準とする分類であるから, クラスの下にサブクラスを設け, この二つのケースを分ければよい<sup>31</sup>. 確かに, 日本の典型的な家族構成である直系家族からなる世帯を研究する場合, どの世代に戸主 (世帯主) が位置しているかを明確にしておくことが必要な場合がある. それぞれの社会に特有な, あるいは理想とする世帯構成に応じて, クラスはそのまま残して, サブクラスという分類単位において調整をすればよいのである.

さて, 最後にカテゴリー, サブカテゴリー, クラス, そしてサブクラス, これら 4 つの単位を連結する作業をおこなわなくてはならない. 当

★表2 修正ハメル・ラスレットモデル

Category	Class	subclass
1 単独世帯 Solitaries	1a 寡男（婦） 1b 独身者 or 結婚不明者	
2 非家族世帯 No family	2a 兄弟姉妹の共住 2b その他の親族の共住 2c 明確な絆を持たないものどうしの共住	
3 単純家族世帯 Simple family households	3a 夫婦 3b 夫婦と子ども 3c 寡男と子ども 3d 寡婦と子ども	
4 拡大家族世帯 Extended family households	4a 上向的 4b 下向的 4c 水平的 4d 4a, 4b, 4c のコンビネーション	
5 多核家族世帯 Multiple family households	5a 上向的副次核を含む 5b 下向的副次核を含む 5c 水平的副次核を含む 5d キョウダイ家族 5e その他	5a i 直系上向的副次核、ただし、同世代に核は1つのみ 5a ii 傍系上向的副次核 5b i 直系下向的副次核、ただし、同世代に核は1つのみ 5b ii 傍系下向的副次核 5e i 5a i+5b ii 5e ii 戸主の核が不明・戸主が単身者であるが直系に縦に核が連結している場合しかも同世代に核が一つ 5e iii 5e i, 5e ii 以外の場合、戸主不明の場合も含む
6 分類不可能 Indeterminate		

  

Category	subcategory	Class	subclass
5 多核家族世帯 Multiple family households	5 i 直系家族世帯 Stem family households		5a i 5b i 5e i 5e ii
	5 ii 複合家族世帯 Joint family households	5c 5d	5a ii 5b ii
			5e iii

然、直系家族世帯と複合家族世帯を分離するために設置したサブカテゴリーと両者が混合しているクラスという単位を連結することはできない。サブカテゴリーと連結可能なのは、サブクラスである。表2に示したとおり、サブカテゴリー 5 i の下位にはサブクラス 5a i, 5b i, 5e i そして 5e ii が位置づけられる。5c, 5d というクラスと、5a ii, 5b ii, 5e iii というサブクラスはサブカテゴリー 5 ii の下位に位置づけられる。当然、クラスという分類単位は上位のカテゴリーという分類単位と結びついているので、ハメル・ラスレットモデルの原型はそのままの形で残されている。したがって、この修正モデルのサブクラスを用いて分類をおこなった研究もハメル・ラスレットモデルを用いて分類した先行研究との比較は可能である。

このような修正を加えることによって、直系家族世帯と複合家族世帯を独立させることができる。繰り返しになるが、時代や社会によって頻度の高い世帯構成は多様である。その社会に適応するようにこのサブクラスという単位を必要に応じて増やしたり、まとめたりする、といった調整作業をおこなえば、大方の世帯構成は分類できよう。この方法で、ハメル・ラスレットモデルのカテゴリーという単位と、矛盾は残るがクラスという単位を生かし、しかも、多様な世帯構成に適応する通時的通文化的な分類モデルである修正ハメル・ラスレットモデルが構築できたものとする。

## 6. むすびにかえて

本稿は、歴史人口学の分野では最も利用頻度は高いが、批判も多いハメル・ラスレットモデルの意義と限界、そして修正可能性について論じた。

ハメル・ラスレットモデルの意義は、なんと言っても、単身者からなる世帯から家族構成が複雑な複合家族からなる世帯まで、広い範囲の世帯構成を分類できる点である。したがって、もっとも通時的通文化的分類モデルとして耐えうるモデルなのである。また、それを証明するように、多く

の地域の世帯構成がこの分類モデルを用いて研究されてきた。

しかし、このモデルの限界は、カテゴリー5と下位単位のクラスに存在した。この点が、批判を生む原因でもあった。まず、直系家族世帯と複合家族世帯が同じカテゴリーに分類されてしまうため、複雑な世帯構成が典型とされる、あるいは理想とされている社会の世帯構成の観察をおこなおうとする場合このモデルは不適合であった。また、カテゴリー5の下位単位のクラスだけが、他のカテゴリーの下位単位のクラスと分類の基準が異なるという矛盾が、多くの混乱を招く原因であることが明らかになった。世帯の形態だけを観察するレベルと、戸主（世帯主）の位置を基準とするレベルを分けることがこのモデルには必要だったのである。

本稿ではこの2点をハメル・ラスレットモデルに修正を加えるという形で反映させ、これを修正ハメル・ラスレットモデルと称し、提示した。元のモデルに回帰できるよう最小限の修正を試みた。直系家族を典型とするわが国の世帯構成はこの修正モデルで十分分類が可能である。しかし、この修正によって、通時的通文化的にあらゆる世帯構成が分類できるようになったとは考えていない。それぞれの地域や時代において優勢な世帯構成にとって必要な修正をサブクラスという単位を使うことで可能にする、という修正可能性を提示したに過ぎないのである。

## 《謝辞》

本稿では、会津山間部4か村の史料を用いている。4か村の基礎シートは、麗澤大学教授速水融先生の下で作成されたものをお借りした。この場をお借りして、速水先生とBDSを作成して下さった成松佐恵子氏、藤田立子氏に感謝申し上げます。

## 《註》

<sup>1</sup> Laslett [1972-a: p. 31] ではこのハメル・ラスレットモデルは、“Structure

of households: categories and classes”と称され、Hammel and Laslett [1974: p. 96] では “Composition of Households Sample Classificatory Table” と称されているが、本稿ではハメル・ラスレットモデルという通称を用いることにする。

<sup>2</sup> 筆者は、これまでいくつかの論文で、ハメル・ラスレットモデルの修正モデルを提示し、実際に宗門改帳を史料として実証研究をおこなってきた。これまでの筆者の関心は、世帯構成の周期的変化にあったので、ハメル・ラスレットモデルのもっとも大きな分類単位であるカテゴリーを修正して利用してきた（岡田あおい [2000] [2001]）。しかし、歴史人口学の研究会である東京セミナーで修正モデルについて報告した際、斎藤修先生と鬼頭宏先生から貴重なコメントを頂戴したことが、もう一度このモデルの修正について考え直すことになった。両先生にこの場をお借りして感謝申し上げたい。基本的な考え方は変わっていないが、これまで提示した修正モデルと多少異なっている点があることをはじめに明記しておきたい。

<sup>3</sup> Le Play [1875], Murdock [1949=1978], 鈴木栄太郎 [1968 (1940)], 中根千枝 [1970]. 分類 (classification) とは、類型をそのまま用いて現実の家族を分析することは困難なために、類型論と論理的な関連を持ち、しかも現実態にうまく適応できる、現実態をもれなく重複なく処理するための一組のカテゴリーである（森岡清美 [1993 (1983)] p. 15）。家族の分類は Lang [1946=1953-54], 森岡清美 [1972].

<sup>4</sup> 森岡清美 [1972] p. 26.

<sup>5</sup> もちろん、これまでも多くの研究者の手により通時的通文化的な家族構成や世帯構成の分類が考案されてきたが、普遍的分類が存在するわけではない。

<sup>6</sup> 鬼頭宏 [1981], 木下太志 [1990], Smith [1978]

<sup>7</sup> Cornell [1981] p. 63.

<sup>8</sup> Lee and Gjerde [1986] pp. 98-99.

<sup>9</sup> conjugal family unit は、夫と妻そして同居している子どもたちからなる (Hammel and Laslett [1974: p. 86=2003: p. 325]). 翻訳では夫婦家族 (Laslett [1972-b=1983: p. 46]) と訳される場合と、夫婦家族単位 (Hammel and Laslett [1974: p. 86=2003: p. 325]) と訳される場合はあるが、本稿では後者に従った。

<sup>10</sup> マードックの社会構造分析、家族の歴史変動研究の分析枠組みに関しては、平野敏政 [1994] pp. 74-80.

<sup>11</sup> Laslett [1972-a], Hammel and Laslett [1974=2003], ラスレット [1983]. extended family households, multiple family households という用語は、

社会学で使われる専門用語とは異なる定義がなされている。この用語の使い方に関しては、落合恵美子 [2003: 496-497] を参照。

<sup>12</sup> Laslett [1972-a]

<sup>13</sup> 徳川後期農民社会の世帯構成の研究としては、鬼頭宏 [1981]、木下太志 [1990]。日本以外の国では、たとえばオットマン・トルコの世帯構成の研究 (Duben [1990]) があげられる。

<sup>14</sup> Hammel and Laslett [1974] p. 96, Table 1.

<sup>15</sup> 小山隆 [1959-a] pp. 211-288, [1959-b] pp. 71-76.

<sup>16</sup> 詳しくは Smith [1978] p. 222 Figure 1 を参照。

<sup>17</sup> 森岡清美 [1972] p. 30, 高木正朗 [1995] p. 196. 森岡によれば小山のモデルでは同世代の直系親族が2人以上配偶者をその家族内にもっているとき、直系家族となる。その理由を、森岡は小山が核家族を積み上げていくという発想が貫徹していないからだと批判している。

<sup>18</sup> Cornell [1981] pp. 63-66.

<sup>19</sup> Cornell [1981] p. 64 Figure 4.2 参照。

<sup>20</sup> Lee and Gjerde [1986] pp. 102-109.

<sup>21</sup> このスキームの説明、および欠点に関しては高木正朗 [1995] が詳しいので、参照されたい。

<sup>22</sup> Lang [1946=1953-54]

<sup>23</sup> 森岡清美 [1972] pp. 27-28.

<sup>24</sup> 再分類については森岡清美 [1972] pp. 30-32.

<sup>25</sup> 陸奥国会津郡金井沢村の例。会津山間部4か村（金井沢村・鶴巣村・石伏村・桑原村）の世帯構成の分析については岡田あおい [2001]。

<sup>26</sup> 高木正朗 [1995]

<sup>27</sup> 戸主を一筆の筆頭者と仮定する場合もあることも明記している (Hammel and Laslett [1974: p. 92])。この表現から必ずしも、戸主（世帯主）がはっきりしない場合でもこのモデルは利用可能であるとハメル & ラスレットは考えているものと思われる。

<sup>28</sup> Lee and Gjerde [1986] p. 99.

<sup>29</sup> 岡田あおい [2000] [2001]

<sup>30</sup> 筆者は、会津山間部4か村や二本松藩の仁井田村と下守屋村の宗門改帳を史料として、世帯構成の周期的変化を、戸主（世帯主）の位置づけまでを含めたクラスという単位を使って観察してみたが、分類があまりに多く複雑になりすぎ、観察の目的であるサイクルの発見がしにくくなった。単純な世帯構成の社会の観察にはクラスという単位が利用できるが、複雑な世帯構成の社

会の世帯構成のサイクルの観察にはこの単位は適当ではないと考える。

<sup>31</sup> 高木正朗 [1995] p. 195.

# 《引用文献》

- Cornell, Laurel L., 1981, "Peasant family and inheritance in Japanese community: 1671-1980. An anthropological an analysis of local population registers", Johns Hopkins University ph. D. dissertation.
- Duben, Alan, 1990, 'Understanding Muslim Households and Families in Late Ottoman Istanbul', *Journal of Family History*, Vol. 15, No. 1.
- Hammel, E. A. and P. Laslett, 1974, 'Comparing Household Structure over Time and between Cultures', *Comparative Studies in Society and History* 16., 落合恵美子 (訳), 「世帯構造とは何か」速水融 (編) [2003]『歴史人口学と家族史』藤原書店 所収.
- 平野敏政, 1994,『現代社会と家族的適応』慶応通信.
- 木下太志, 1990,「東北地方一農村における世帯の変遷, 1760-1870」『民族学研究』55-1.
- 鬼頭宏, 1981,「近世農村における家族形態の周期的変化」『上智経済論集』vol. 27, no. 2・3 合併号.
- 小山隆, 1959-a,「家族形態の周期的変化」喜多野清一・岡田謙編『家 ―その構造分析』, 創文社 所収.
- 小山隆, 1959-b,「家族形態の類別」新明博士還暦記念論文集刊行会編『社会学の問題と方法』有斐閣.
- Lang, O., 1946, *Chinese Family and Society*, 小川修 (訳) [1953-54]『中国の家族と社会』岩波書店.
- Laslett, Peter, 1972-a, 'Introduction: The History of Family', Laslett and Wall (ed.), *Household and Family in Past Time*, Cambridge.
- Laslett, Peter, 1972-b, 'La famille et le ménage: Approches historiques', *Annales E.S.C.*, 4(5): 847-72., 林田伸一 (訳), 「家族と世帯への歴史的アプローチ」二宮宏之・他 (編) [1983]『アナル論文選2 家の歴史社会学』新評論 所収.
- ラスレット, P., 1988, 酒田利夫 (訳), 「日本からみたヨーロッパの世帯とその歴史」, 斎藤修編著 [1988]『家族と人口の歴史社会学 ケンブリッジ・グループの成果』リプロポート 所収.
- Lee, James and Gjerde, Jon, 1986, 'Comparative Household Morphology of



- Stem, Joint, and nuclear Household Systems: Norway, China, and the United States', *Continuity and Change* 1(1).
- Le Play, Pierre Guillaume Frédéric, 1875, *L'organisation de la famille selon le vrai modele: signale par l'histoire de toutes les races et de tous les temps*, Paris.
- 森岡清美, 1972, 「家族の形態と類型」 森岡清美編『社会学講座 3 家族社会学』, 東京大学出版会 所収.
- 森岡清美, 1993 (1983), 『新しい家族社会学 (三訂版)』 培風館.
- Murdock, G. P., 1949, *Social Structure*, Macmillan, 内藤莞爾 (監訳) [1978] 『社会構造 核家族の社会人類学』 新泉社.
- 中根千枝, 1970, 『家族の構造』 東京大学出版会.
- 岡田あおい, 2000, 「近世農民社会における世帯構成のサイクル —二本松藩 2 カ村の史料を用いて—」 『社会学評論』 第 51 卷 1 号.
- 岡田あおい, 2001, 『学位請求論文 徳川後期村落社会における家系の継承と世帯 —南山御蔵入領の宗門改帳を通して—』
- 鈴木栄太郎, 1968 (1940), 『日本農村社会学原理』 時潮社. (『鈴木栄太郎著作集』 第 1 卷, 第 2 卷に再録.)
- Smith, Robert J., 1978, 'The Domestic Cycle in Selected Commoner Families in Urban Japan: 1757-1858', *Journal of Family History*, Vol. 3-3.
- 高木正朗, 1995, 「家族分類スキームと宗門改帳」 『国際日本文化研究センター紀要』 第 12 集.